

2020/08/16

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑪

『救われるまでの話』 ヨハネ 4:30-38

■あなたがたの知らない食物

「そこで、彼らは町を出て、イエスのほうへやって来た。そのころ、弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください」とお願いした。しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と断言してはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。」(ヨハネ 4:30-36)

イエス様が私たちに用意しておられる食物とは、神が始めたみわざを成し遂げることです。それは、神様が御言葉の種を撒き、成長した実を私たちが収穫すること、すなわち「伝道」です。

「刈る者が受ける報酬」とは「永遠のいのち」のことです。私たちはすでに永遠のいのちを受け取っています。また、「永遠のいのちに入れられる実」は、原文では「永遠のいのちに至る実」です。「永遠のいのちに至る」とは、これから永遠のいのちを受け取ることではなく、すでに永遠のいのちを持っている人が神との関係を豊かにすることです。イエス様は「永遠のいのち」を「水」になぞらえ、次のように語られました。

「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」
(ヨハネ 4:14)

イエス・キリストが与える水、すなわち「永遠のいのち」を受けた者は、永遠のいのちに向かっていきます。「永遠のいのち」は、「霊のからだ」とも言われます。神の呼びかけに応答した人は霊のからだを着せられ、イエス・キリストを知ることができるようになります。ただし、神への応答は潜在意識の中で行われるので、神に応答していても救われた自覚はありません。収穫とは、潜在意識の中で救われた人に御言葉を語り、救いを自覚できるようにすることです。神が人を救い、人が刈り取るのです。

つまり、伝道とは、永遠のいのちを持っている人が永遠のいのちに至るように、御言葉を

語ることです。

「こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ているのです。」（ヨハネ 4:37-38）

イエス様は、「神が救った実を収穫するために、あなたがたを遣わすのだ」と言われました。救われた人にとって、他の人が救われることは、大きな喜びです。イエス様はそれを「あなたがたの知らない食物」と言っておられます。その喜びこそ心の糧だからです。「神のみわざを成し遂げる」とは、「神が救った者をあなたがたが収穫すること」です。時には、御言葉を語っても自分で刈り取れないときもありますが、必ずほかの人が刈り取る日がやってきます。

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」（ヨハネ 10:10）

楽しいことはいろいろありますが、家族が救われ、賛美し、愛する姿を見ると、喜びが湧き上がります。この働きに参加することが、刈り取りです。私たちは、永遠のいのちを手にし、霊のからだを着せられて、神との交わりを豊かにし、さらに平安を増し加えていくのです。これがまことの食物です。

■救いとは何か～神が種をまいて刈り取るとは～

聖書の言葉を学ぶ時は、自分の経験で理解しようとするのではなく、聖書の言葉で理解しなければなりません。自分の経験によって神を理解しようすると、わからなくなってしまう。パウロも、「自分の経験によって神を知ろうとはしない」と言っています。

ところが、私たちの理性は、さまざまな想像によって神を作り上げます。カントはこれを理性の暴走と呼びました。その結果、人は、自分の考えに合わせて、聖書の話を修正して理解しようとする間違いを犯しています。それではまったく信仰が成長しません。人は神を認識できないのですから、聖書に書かれていることを信じるしか、神を知る方法はないのです。私たちが聖書のことばを理解できないのは、自分が置かれている状況がわかっていないからです。人は、どのような状況にあるのでしょうか。

1. 人は生まれながらに死んでいる

「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」（創世記 2:7）

神は、私たちのからだを造り、そこにご自身のいのちを貸し出して、人を造られました。からだといのちによって、精神が生まれます。これが人間です。

神がご自身のいのちを貸し出してくださったのは、私たちが三位一体の神と交わり、互いに愛し合い、信頼し合う者となるためです。神のいのちを持っているということは、私たちの中には神の愛が存在します。愛とは、神と一つになろうとする運動です。

神と一つになろうとしてもこの地上では神は見えませんが、人は皆、神の本質である永遠と自由を求めています。また、人は、神と一つになることを望む思いによって、一致や統一を求めています。世界が一つになることを望んだり、家族が一致することを望んだり、統一された美しい音楽や絵画を求めたりするのは、神から貸し出された魂が神と一つになることを求める思いから発しています。これが、人の中にある普遍的な運動です。それらのものが得られないため、それが刺激となって意識が生じているのです。

「人間」とは何かというと、からだでも魂でもなく、自分を認識する「精神」のことです。この地上で、からだはいつか滅び、神から貸し出された魂は神に返却されます。そして、刺激を持ち込むからだは朽ちると、精神も存在しなくなるのです。こうして人は滅びます。

神が人を造ったとき、もともとからだは永遠に生きるものだったのですが、悪魔がアダムとエバをだまして死を持ち込んだことによって、人も世界も有限性になりました。このような状態を、聖書は「死人」と呼んでいます。

「しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』」

(ルカ 12:20)

「取り去られる」とは、「アパイテオー」という言葉で、「返却を要求する」という意味があります。体が朽ちれば魂は返却されて、精神は機能しなくなります。死んだらそのまま天国で生きることができるというのは、人間の想像です。生まれながらの人は、ただ滅びに向かっているのです。

私たちは、神の前には事実上死んだ状態で、私たちに許されている時間は、この地上で生きている間だけです。その間に朽ちない体を復活させてもらわなければ、滅んでしまうのです。つまり、霊のからだを着せられ、永遠のいのちを受けとらなければならないのです。これが救いです。

「というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。」(I コリント 15:21-22)

2. どのように死を滅ぼすか

「最後の敵である死も滅ぼされます。」(I コリント 15:26)

多くの人が、神はアダムの罪に怒って死を与えたと誤解していますが、死は神が与えたものではありません。神にとって、死は敵です。では、神はどのようにして死を滅ぼすのでしょうか。

「ところが、ある人はこう言うでしょう。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。あなたが蒔く物は、後にできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。しかし神は、みこころに従って、それにからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります。」(I コリント 15:35-38)

この I コリント 15:38 を、原文どおりに訳すと次のようになります。

「神は御心のままに、それに体（霊の体）を与えています。一つ一つの種にそれぞれ体（霊の体）を。」

「種」とは「魂」のことです。神は、人間ひとりひとりの魂に、霊のからだをすでに着せておられるということです。つまり、霊のからだはすでに復活させられているのです。

「血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」(I コリント 15:44)
「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」(I コリント 16:52)

終わりのラッパとは肉体の死です。私たちの肉体が減ぶとき、霊のからだは表に現れて復活し、魂はそのまま霊のからだに貸し出された状態が継続します。ですから、一瞬のうちにそのまま復活し、死は何の効力も持たなくなるのです。これが神の救いです。神はこのように私たちに死の体から救ってくださるのです。

3. 神が種をまいて刈り取るとは

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」
(ヨハネ 5:24-25)

肉のからだしか持っていない私たちは死人です。このままでは死ぬことが決まっています。その者が神の声を聞き、その声に応答する者は生きるのです。

救いの第一段階は、神が呼びかけをし、それに応答することです。ただし、これは潜在意識の中のことなので、自分ではまだ気づいていません。しかし、この段階ですでに霊のからだは着せられたので、終わりの日によみがえることができます。

次に、救われた潜在意識は、顕在意識に働きかけます。ところが、顕在意識はこの世の意識なので、神がいることがわかりません。そこで、人は精神の中で葛藤が生じます。しかし、救われた人には、それまでと決定的に違う点があります。それは、霊のからだを着ているということです。霊のからだはイエス・キリストを知ることができるからだです。

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ 17:3)

神の国にいる方を知ることができるのは、霊のからだを持っているからです。だから、イエス様は「あなたがたは神の国のただ中にいる。」(ルカ 17:21)と言われました。それは、神の国で暮らすからだを持っているということです。それなのに、顕在意識のほうはまったくそのことがわかっていないので、救われた自覚がないのです。

そこで、救われた実を刈り取る作業が必要になります。これが、伝道です。それは、救われている人に対して、「あなたは救われているよ。あなたが信じているのはイエス・キリストだよ。」と神の言葉を伝えていく作業です。この状態にある人のことを一般に求道者という呼び方をします。なぜか御言葉を聞きたい、なぜか教会に興味を持つ、それは、救われて霊のからだを持っているからです。こうして、御言葉を聞くうちに、葛藤はあってもイエス様を信じるようになるようになっていきます。知性では理解できないことが、信仰で信じられるように変わるのです。

「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか」とイザヤは言っています。そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」(ローマ 10:14-17)

イエス・キリストを信じる信仰は、御言葉を聞くところから始まります。なぜ御言葉を聞いて信じることができるのか、それは潜在意識の中で救われて霊のからだを着せられたからです。救われているので、葛藤があっても御言葉に引き寄せられるのです。やがて顕在意識においても、自覚できるようになり、イエスは主であると告白できるようになります。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」（ローマ 10:9-10）

これが、救いが自覚できるということです。洗礼を受けたら救われるのではなく、死人が呼びかけを聞き、その呼びかけを聞く者が生きるのだとイエス様は言われました。自覚と救いとは別なのです。

永遠のいのちを持っている人が救いを自覚することによって、永遠のいのちを豊かにすることができます。これが刈り取りです。御言葉を伝え、刈り取ることを喜びとできる人は幸いです。この「蒔く者と刈る者がともに喜ぶ」ことが、イエス様が私たちに用意しておられる食物です。あなたはこの喜びを食物としているのでしょうか。パウロは、このことを知って、「すべてのことを福音のためにしています」という人生に変えられたのです。

この救いの型は、創世記 3 章に見ることができます。

■イエス・キリストを信じる信仰によって救われるとは

「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」（ローマ 3:22）

長い間、キリスト教は「イエス・キリストを信じることによって救われる」と教えられてきました。しかし、それでは、キリスト教が日本に伝えられる前の日本人は救われないのか、イエス様がこの地上に来られる前の人は救われないのか、という疑問が生まれます。

実は、この「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」（ローマ 3:22）の訳は、100 年前から問題視されていました。そして、約 20 年前、この訳し方の間違いが明らかになり、ついに新共同訳の最新版では次のように変更されました。

「神の義は、イエス・キリストの真実によって、信じる者すべてに現されたのです。」
（ローマ 3:22 聖書協会共同訳）

つまり、「イエスを信じる信仰」ではなく、「十字架のあがない」によって救われるということです。原文は「イエス・キリストのピステイス」と書かれているので、「イエス・キリストを信じる信仰」と訳すには、初めから無理があったと言わざるを得ません。「イエス・キリストのピステイス」は「イエス・キリストの信実」と訳すべきだという説もありましたが、あまり一般的な日本語ではないため「真実」が採用されました。この点については、注意書きにそのように記されている聖書もあります。

「イエス・キリストを信じる信仰による救い」だと、救いの主体は人間の側になってしまい

ます。しかし、救いの主体はあくまでも神です。イエス・キリストの十字架のあがないによって、信じるもの、すなわち応答するものはすべて救われるのであり、救われていたから、イエス・キリストを信じることができたのだということです。救うのはあくまでも神であり、人ではないのです。

「こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ているのです。」（ヨハネ 4:37-38）

「あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。」

（ヨハネ 4:35-36）

私たちは、神が救った人に御言葉を語り、刈り取りをします。この作業を神と共に、神と共に福音の恵みを受け取り、神と共に喜びを分かち合うのです。このことが、喜び、生きがいとなる人はなんと幸いですでしょうか。パウロは、次のように言っています。

「私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みとともに受ける者となるためなのです。」（I コリント 9:23）